

『第三王国で感じられない微妙な変化』 第四部抄訳

松本 美千代

要 旨

1989年にオービー賞（Obie Award）オフ・ブロードウェイ・ベストプレイを受賞したスーザン・ロリ＝パークス作『第三王国における微妙な変化』の最終章、第四部の抄訳である。本作品は、約数百万人と言われるアフリカ人の犠牲者を出しながら続けられた奴隷貿易や奴隷制の過去が、現代のアフリカ系アメリカ人のアイデンティティ形成に影響を及ぼす様相を、多彩な象徴を用いて描いた作品である。パークスの作品は斬新で伝統にとらわれない演劇的手法として知られるが、彼女のメタファー、言語反復、婉曲、言葉遊び、黒人口語表現を駆使した技法は、二カ月以上にわたる奴隷船の過酷な環境の中で、海に身を投じてサメの餌食になるか、あるいはアメリカで奴隷として生きるかの選択に葛藤するアフリカ系アメリカ人の先祖たちの過去を現代人の記憶なかに再現している。パークスは記憶するという意味の re-member にハイフンを付し、再びメンバーに取り入れるという意味を持たせる。本作品はアフリカ系アメリカ人の、記録されずに忘れ去られ、ばらばらになった（dis-membered）過去の歴史を想像の場である現代アメリカの舞台において再現するという儀式的パフォーマンスを通して、アフリカ系アメリカ人の現代の姿を捉えようとしたものである。

I. はじめに

スーザン・ロリ＝パークス（Suzan-Lori Parks, 1964-）の初期の代表作である『第三王国で感じられない変化』（*Imperceptible Mutabilities in the Third Kingdom*）は、1989年にニューヨークのBACA ダウンタウン劇場で初演され、オービー賞を受賞した。本作品において展開されるテーマ、スタイル、手法、形式などの要素は、後にパークスが受賞することになる2002年のピューリッツァー賞受賞作品『トップドッグ／アンダードッグ』（*Topdog/Underdog*）をはじめ、パークス作品の礎となっていくことから、パークス研究においては重要な作品として位置付けられている。この作品は、時代、場所、登場人物のまったく異なる四つの物語から編成され、それぞれの物語が、特定の台詞、場面、テーマ、暗示的キーワードといったモチーフによって連結されるという構造を特徴としている。パークスはこれらの反復的なモチーフのリフレインによって、アフリカ大陸から過酷な中間航路を生き延びた後、アメリカで奴隷となったアフリカ系アメリカ人の歴史が、風化しながらも依然としてアメリカ社会に残存する心象風景を多面的に伝えている。あいまいで捉えどころのない過去の黒人差別の記憶は、今もなおアフリカ系アメリカ人の存在を現代アメリカの政治的・経済的周縁に押しやるだけでなく、アフリカ系アメリカ人個人のアイデンティティを、白人文化の物差しによって形成する根源的な要因

となっている。ニューヨークタイムズ紙の批評家メル・ガソーは、『第三王国における微妙な変化』は「神話と象徴」に裏打ちされた黒人の認識・感情・記憶の総体についての研究として高く評価した一方、パークスの劇作家としてのアイデンティティは、皮肉にもアフリカ系アメリカ人のアイデンティティの喪失を描くことによって形成されたと述べている。

本抄訳は、『第三王国における微妙な変化』の最後の部である第四部、「ギリシャ人（あるいはナメクジ）」という奇妙な表題を持つセクションである。物語は黒人の海兵隊の軍曹とその家族についての寓意劇として展開する。アフリカ系アメリカ人のスミス軍曹は、白人社会での成功を望むうち、ギリシャ神話のイカロスのように空から落ちて来たという男をキャッチし、その際に地雷を踏み、両脚を失ったという。一方、スミス軍曹夫人とスミス軍曹の休暇の度に増えていった二人の娘と息子たちは、スミス軍曹の帰りと彼の昇進を待ち望んでいる。しかし皮肉にも両脚を失いながら昇進して帰宅したスミス軍曹を待っているのは、失明して、夫を判別できない妻と、約束をしていた土産物をせがむ子どもたちであった。家族に功績を認められようと、文字通り身を粉にして白人に隷属し、妻もまた自らの孤独や疲労を抑圧し、夫の昇進を支えることを最優先にした結果、スミス軍曹一家は家族崩壊、身体および精神性の喪失に直面する。第一部の標題は「カタツムリ」であったことを考えると、第四部のナメクジという表題は身を守る殻のないナメクジの悲劇、言い換えれば、守られるべき祖国を失った（ホームレス同然の）アフリカ系アメリカ人への寓意であろう。

パークスの父親はヴェトナムやドイツに赴任したアメリカ軍の将校であり、パークスも父親と家族とともに学生時代を異国の地で過ごしている。作品同様、パークスには姉と弟がいることから、作品は自伝的要素を反映していると言える。しかし軍高官であったパークスの父とは違い、『第三王国における微妙な変化』のスミス軍曹の任務は、「岩の清掃」という雑務である。彼の誇りは他の誰の岩よりも自らの岩が清潔に保たれているということであり、多くのアフリカ系アメリカ人の職がそうであるように、些末な職に希望の見えないプライドを見出している。それでもなお、彼は一家の大黒柱として、社会的任務を背負う「国家の一員」であることを証明しなければならない。いわば、スミス軍曹はスミスという、そのありふれた名前のように、現代アメリカ社会の低層を占めるアフリカ系アメリカ人の一般的な象徴である。

スミス軍曹の昇格の報償は、自分専用のデスクとされるが、パークスは mine という語義を多義的に用いて、アフリカ系アメリカ人の現代における苦境を表現している。「私はデスクの前に立っている。私のデスクだ。私の物になるぞ。」彼はデスクが mine（「自分の物」）となり物質的な成果を得ることを心待ちにする。しかし mine はマフィーが「mine は手足をばらばらにするもの」と言うように「地雷」をも意味している。また「君は私の子ども（mine）なのか？」と軍曹が言うように自分の「家族」や、自分の「子どもたち」という意味や、さらには自己存在としての「アイデンティティ」という意味も含んでいるであろう。言い換えればスミス軍曹は、白人社会の一員として自己（mine）犠牲のもとに働くが、人助けの際に地雷（mine）を踏み、自身（mine）の一部である脚を失い、長期赴任のため息子（mine）や家族との絆を失いながら、その報償としてデスクが自分の物（mine）になることを待ち望んでいるといった皮肉的な意味になる。「mine が多すぎると戦争に負ける」というマフィーのセリ

フにあるように、mine は身体を破壊する地雷だけではなく、戦争を起こす私欲であり、物質的欲に囚われたスミス軍曹の姿でもある。

フィリップ・コリンは、「スミス軍曹の身体障害は、黒人の自己や昇進を打消し、黒人の身体をリンチ（切断、変形）することを望む白人の権力世界において、分断されたアイデンティティの象徴である」（Kolin, 61）と述べている。スミス軍曹の両脚切断、および彼の妻の失明という象徴は、アフリカ系アメリカ人が現代社会において、自己を卑下し、身体を傷つけ、アイデンティティの喪失という犠牲を払いながら生きていることの象徴と解釈できる。作品の第一部では、主人公たちは現代社会の不当な迫害によって害虫扱いされる境遇に泣く。第二部では祖国アフリカから引き剥がされたうえ、奴隷船に詰め込まれ大洋の船上で生死をさまよう。第三部では奴隷アレサが抜歯され、白人家庭に搾取されたあげく記憶から忘却される模様が描かれた。パークスはこうしたモチーフを通じて、アフリカ系アメリカ人が精神の根幹を骨抜きにされたまま、アメリカ社会のなかで居場所を見つけられず疎外される苦境を具現化している。さらにスミス軍曹がデスクという物質的目標を優先した結果、個人の精神性や家族とのつながりを喪失するといった側面は、アフリカ系アメリカ人のみならず、資本主義社会における人間が物質的な昇進に盲進するあまり、家庭や個人の精神をないがしろにするといった普遍的な問題も同時に提起している。

パークスは「写真」という小道具を巧みに用い、イメージと実像の差異を比較提示する。第三部では、泣いている奴隷主の子どもたちの笑顔を写真に残そうと、奴隷のアレサが懸命に子どもたちを笑わせる場面描写を通して、写真と記憶の差異を浮き彫りにしている。そして第四部もスミス軍曹の写真撮影の場面から始まる。彼は白人社会における有能な軍人として写真に納まろうと、自画像を取りつくろっている。この場面はアフリカ系アメリカ人の社会におけるメタシアター性、役者が舞台上で演技をするように、黒人のアメリカ社会における存在は演劇性と常にともにあることを反映している。写真は彼の実像ではないが、彼が自負する報償としての線章やデスクは彼のアイデンティティとして写真に記録される。皮肉にも昇格を待ち望んでいた妻は失明するためそれを見ることができないが、写真として残された歴史は残り、真実の記憶は消失する。

第四部後半Fの場においても、スミス軍曹は息子のダフィーに財布一杯の写真を見せる。「ほら写真がある。お財布一杯の写真だぞ、これが私だ」と言う彼に、息子は「違うね。それ、ほくだよ。ほくたち似てるんだよ」と答える。スミス軍曹は家族の写真を持ってはいても、息子の顔すら記憶していないほど、彼と家族との絆が希薄であることを露呈する。また、スミス軍曹は時差の関係により家族と四時間しか「同じ一日」を共有できないとつぶやくが、つまり彼は時間的にも、空間的にも、家族と引き離されて暮らしているのである。家族との絆や記憶の喪失という状況は、奴隷時代と変わるものではない。アフリカから拉致され奴隷船に乗せられた過程や、奴隷売買によって家族離散となった過去は、現代のアフリカ系アメリカ人の家族関係の中に引き続き再現されている。スミス軍曹の配属先は大洋上の島とされるが、そこは奴隷船上において反逆的な奴隷が船から破棄された中間航路上の海上であるかもしれない。その意味では、アフリカ系アメリカ人のアイデンティティは過去から現在に至るまで「変化は感じられない」のである。

スミス軍曹の社会的立場は、家庭にも浸透し家族のメンバーに影響を及ぼしている様子が象徴的に描かれている。子どもたちは母親のことを軍曹夫人と呼び、母親は父親について Maker（製造者）と解説する。母親は子どもとの会話よりも、服にアイロン掛けが施されていることを何よりも重要視している。机は夫の昇進の象徴であるため、スミス軍曹夫人は子どもたちが机を汚さないよう四六時中神経をとがらせており、シーンFにおいてはストレスによって意識が混濁する中、机にまでアイロンを掛けさせようとするほどである。軍隊的規律のような価値観のもと、スミス夫人が誇りにするのは、長旅をして夫に会いに行く際に汗一つかいていないように装い、糊付けされた服装に着替えて小奇麗な姿を夫に見せることである。夫の休暇の度に子どもを規則的に作ってきたため、失明して夫かどうかも認識できないにもかかわらず、次の子作りに意欲を示すスミス軍曹夫人の行動には、滑稽なまでに歪曲したアイデンティティが見て取れる。デボラ・R・ゲイスは作品には次のような逆説的なメッセージがあると言う。劇を閉じるイカロスの神話に似たスミス軍曹の最後のエピソードにあるように、「人間性は向上を求めて努力する。しかし、奴隷制や戦争のような抑圧的な社会的な行為を通して、私たちは自分自身や他人の人間性を認識することができないのかもしれない」（Geis, 57）。『第三王国における微妙な変化』 第四部「ナメクジ」の場合は、アフリカ系アメリカ人の分断されたアイデンティティを多彩な技法を駆使して象徴的に描きながら、同時に資本主義社会のなかで翻弄される個人と家族というより普遍的な問いを投げかけている。

II. 抄 訳

第4部：ギリシャ人（あるいはナメクジ）

A.

スミス軍曹：4枚撮ろう。4パターンで。4枚、こう、机の上にね。はい、お願いします。カラーでね。ここは気張って。奮発だ。よし。みんなに黒い靴を見てもらわないと。カーキー色のシャツに緑色の袖賞。今日はモップだ箒、バケツはなし！まず座る。いや、立つか。感じるな。ここに。今日私は「昇進」する。私の運命の出来事が、今日、ここに訪れる。どんな出来事か。それはわかりません。でも、たしかに訪れることは訪れる。確実に運命はその方向にやってくる。まもなく、おと、ずれる。当然の流れで。順当なこと。来るところにはやってくる。私は感じる。ここに、感じる。あしたのこの時間、私は「昇進」する。司令官と握手をしている。どうもどうもなんて、友達みたいに挨拶しているんだよ。机が与えられる。そりゃあ昇進するんだから、机をもらうだろう。机のところに立ってさ。俺の机だよ。俺の机になるさ、とにかく俺のになるのよ。この机じゃなくなつて、ちょうどそんなような机だろうよ。手はポケットに入れる？いや、出すか。仕事の準備は万端。はい、スミス軍曹は机に向かっています。今仕事に取り掛かるところです。んで次。二枚目の写真はと。机の上に右手を置きます。聖書の上に置くみたいにね。神と国。ここに仕事を愛する男有りってね。この男の名はスミスという名前です。昇進するんですか？って夕方には線章だよ！すごいよね。夕方には線章って。机をもらうのは昇進の証拠。みんな机をもらうんだ。なぜかと言うと、上から危険が降ってきたら、止まって、よく見て、よく聞いて、

そして机の下に、飛び込む（机の角に頭をぶつけないように慎重にね）飛び込め！安全な机の下に飛び込め。亀みたいにね。甲羅の中で危険が通り過ぎるのを待つ。撃ったりなんだりしたくないんだよ。心配かけたくないからね。はい、お次。三枚目。はい、あ、そうだ。今度は座ろう。手は、組んで。撮っていいよ。いや、腕を組むかな。次、四枚目。撮れます？手を本の上に置いて。本は開いておいてと。大きな机でほほ笑む男。スミス軍曹には書類の山があるけど、心配には及ばない。軍曹は良く働くし有能だからね。待って。スマイルだ。よし。いいぞ。撮ってくれ。職場でスマイル。笑っている方がみんな喜ぶもね。

(飛行機の通過音)

B.

スミス軍曹夫人とバフィー。素敵なお家。

バフィー：ママ、ビロクシー・ツインズは今日何着るの？

スミス夫人：なんか良いかんじの。

バフィー：ピンクのしましまの緑のオレンジと黄色のふわふわのセーターか、青いコートドレスでダブルボタンのと、どっちが良い？

スミス夫人：形状記憶なの？シワ防止加工になっている服にしてちょうだい。シワシワで到着したくないでしょう。私なら、はっきりした茶色と白の水玉模様のを二人に着せる、それに一票。茶色と白の水玉模様のを二人に着せてあげてちょうだい。

バフィー：茶色と白の水玉模様の服なんてない。

スミス夫人：形状記憶が一番。水玉模様にしなさい。

バフィー：手でしわを伸ばすから。ママ、あたしの手ってときどきアイロンみたいに熱くなるんだよ。ほら、ジャーン。熱いでしょう。アイロンアイロン。

スミス夫人：机の上でアイロンかけるんじゃない。パパの机はきちんとしておいてあげないと。糊は使った？糊！

バフィー：糊、はい、糊ですね！あー、糊つけたら留め金が取れちゃった。

スミス夫人：だいじょぶ。留め金三つは取れないから。

バフィー：風が吹いてきたらどうするの。三つの留め金が取れちゃったら。裸になっちゃうよ。風で服が飛ばされたら、裸になっちゃうよ。

スミス夫人：アイロンかかっているの？持ってきて。触ってみるから。だいじょぶ、バフィーちゃん。

バフィー：服が脱げたらどうするの？裸んぼになっちゃったらどうするの？裸んぼで外にいられないよみんなに見られて恥ずかしいでしょ⁽¹⁾。

スミス夫人：アイロンがかかってていいわね。シワになっているのは好きじゃない。

バフィー：こんな、こういう感じに風が吹いてね、そしたらね裸んぼになっちゃったら、どう……

スミス夫人：双子の後に隠れればいでしょう。二人はすごい似てるんだから、でしょ。そっくりな

んだもの、三つ留めの裸のピロちゃん（ピロクシー・ツインズ）が四つの留めの服をちゃんと着ているピロちゃんの後ろに隠れればいいじゃない。

バフィー：ねえ、ママ、ピロクシー・ツインズはどこへ行くの。

スミス夫人：お出かけです。

バフィー：お出かけってどこ。

スミス夫人：お出かけはね……、外。

バフィー：外にお出かけしたら誰かに会うの？

スミス夫人：製造者に会うのよ。二人の製造元に。いい？大事なことでしょ。パパが最後にお休みもらったとき、あなたを連れて見せに行っただよ。覚えている？なんてたって二千と百五十三回のバス停を通ったのよ。三日もバスに乗って。各駅停車だからね。高速バスに乗れなくてさ。キャッスルトンで乗り換えたの。他の人たちはバスセンターの中で待っているのに、うちらは外で待ってたんだよ。雪の中ね。バスがカーブで曲がって入ってくるとき一番初めにバスを見たいと思ったからさ。バスは海岸も通ったんだよ。そのときには乗り込むのが一番最後になっちゃったけど。後ろの席になったら後ろの席にうんと人が入ってきたな。海岸まで行ったわよね。パパに会ったのよ。覚えている？

バフィー：うん。ピロクシー・ツインズがね……

スミス夫人：あら、記憶力がいいこと。……だってあなたが生まれる前のことよ。あなたの製作者に会いに連れてったんだから。緑と白のストライプを着て、バスに乗って……そしたらシワシワになっちゃって。茶色と白の水玉のに着替えなくちゃならなくなってね。そこで着替えたのよ、バスの中で。ていってもトイレのなかだけどね。だって、どこでも着替える女っているじゃない。人がいてもお構いなしにさ。あたしは違うよ。このスミス夫人はちがう。着替えなきゃならないんだったらトイレに行く。長蛇の列だってしょうがないよ。移動式トイレに行くってことは特別なことなんだよ。特別にさせてもらったのは、パパのためにきれいにしていたかったからさ。長距離なんて移動していないし汗もかいていないふうに見せたかったからね。

バフィー：ピロクシー・ツインズも茶色と白のを着る……

スミス夫人：海岸でバスを降りてさ。空がキラキラしていて、すごいブルーだった。でも見てなかったというか。あの人しか見てなくて。スミスさん。あなたのパパのこと。目は釘づけだもん。「スミス夫人！」ってお父さんが大きな声で言うから、みんなに聞こえちゃってさ。「全然旅していないみたいだし汗もかいていないね」って。

バフィー：うれしかったんだ。

スミス夫人：そりゃね。

バフィー：うれしかったんだ。

スミス夫人：そりゃだって「全然旅していないみたいだし汗もかいていないね」って。

バフィー：私もうれしいな。

スミス夫人：なにが。

バフィー：……うれしいことが……

スミス夫人：なるほどね。大家族を作るわよ。お父さんの休暇がまたあるのよ。妹なんてどう。バフィーちゃん？

バフィー：ピロクシー・ツインズに妹はいらないよ。双子じゃなくなっちゃうもん。

スミス夫人：あなたの隣のベッドにしてあげる。

バフィー：ピロクシー・ツインズはどこに寝るの？

スミス夫人：「エフォート」の人は来た？

バフィー：0-800。

スミス夫人：何をあげたの？

バフィー：フロアスタンド。

スミス夫人：渦巻き飾りのついたやつ？そう。ま、どのみち使わないか。必要なのは、ほら、もう一人の女の子。あなたと妹。あなたに妹ができるのよ。バフィー、机にツインズを乗せないで。机はパパのためにきれいにしておかなきゃ。二人の娘っていろいろとつり合いが取れるわね。それから、つぎにパパが帰ってくるときには茶色と白にするからね。

(飛行機の音が大きくなる)

C.

スミス軍曹：私はいま岩の上にあります。ご覧のとおり、岩は海の上。我々第20-53部隊は想像するよりも水に近いです。というかむしろ水のなかにいます！しかしボートには乗っていません！しかし、潜水艦のなかにもいません！我々第20-53部隊はある「島」にあります！大洋の真ん中にある大きな岩です。バフィーちゃん、今度お母さんに大洋に連れてきてもらったなら、水の遠くを見て手を振ってね。こちらから振り返すからああ！眼鏡をかけないと見えないかもね。かけてもらった方がいいと思うほんとに小さい塵みたいに見えるから。でもねすごく遠くを見たら私が見えるよ、そしてねすごく一生懸命手を振ってくれたら、こっちからも振り返すからあああああ！バフィーちゃん、今度お母さんに大洋に連れてきてもらったなら、投げキッスをしてねそしたらお返しになげるからあああ！さて、バフィー、第20-53部隊の私と連絡を取るためには大きな投げキッスをしないとね。お母さんに手伝ってくれるように頼みなさい。きっとお母さんは私がここ第20-53部隊でお互いに助け合っとも働きちゃんと仕事をこなしているように、助けてくれるさ。ここ第20-53部隊ではいろんな人がいろんな仕事をしている。地図を読む人。飛行機を操縦する人。我々の島の家の周りを見張る人がいる。私の仕事は岩を見張ることだ。今まさに私が立っている岩をね。我々の司令官の責任者の人は、きれいな岩が好きなんだ。私の箒が見えるかな？このモップも。私の仕事は岩をきれいにすること。私の岩はとてもきれいだよ。父さんの岩はこの島の家にある岩の中で一番きれいな岩さ。良い仕事をするから司令官に喜んでもらっているよ。父さんは司令官を助けて司令官は父さんを助けてくれるのさ。父さんの司令官はね、時期が来たら、いい仕事をきっちりしたってことで報酬をくれると思うよ。もうすぐに司令官か

ら表彰されてそしたらもっと大きくて重要な仕事につくことになるよと思う。まあ、この我が島ではそちらの側面の方が重要なんだけど。そしてお前のパパは「昇進」する。そしたらパパは家に帰る。縞じゃなくて線章を付けて帰るから、おまえも母さんも鼻が高いぞ。さて、仕事の時間だ！パパはバフィーが大好きだよ。大きなキスと大きなスマイルを送ります。

(飛行機音が大きくなる)

D.

スミス夫人、バフィー、バフィー。素敵な家。

マフィー：なんでパパは私に手紙をくれなかったの？

バフィー：マフィー、「なんで」じゃなくて、「どうして」って言いなさい。

マフィー：どうしてパパは私に手紙をくれなかったの？私のことが書いてなかった。

スミス夫人：バフィーちゃん、台帳ある？「件名」は：んー、手紙。請求書以外の欄を見て。「差出人」は？書いて……

マフィー：なんでパパはマフィーのことも言ってくれなかったの？

バフィー：マフ、机の下から出なさい。スミス夫人、「スミス軍曹」と書きますか？

スミス夫人：その通り。

マフィー：私の名前を知らないの？マフィーだよ。マフィーの名前知らないの？

バフィー：「内容」は？

マフィー：私のこと知らないの？マフィーだよ。

スミス夫人：んー、「雑報」と書くか。

バフィー：雑報。

スミス夫人：スラッシュして、「軍務報告」として。

バフィー：了解。

マフィー：あたしのことが嫌いなんだ。スミス軍曹は私のことが嫌いなんだよ、ね、バフィー。軍曹はスミス夫人とバフィー・スミスと自分の机だけが好きなんだ。マフィーのことは好きじゃない。私はマフィー。私のことは好きじゃない。

バフィー：そんなことないよ。

スミス夫人：「功績の兆候」：えー、えーと、書くことは、「……」。前回何て書いたかしら。

マフィー：私は愛されていない。父さんは机のことも好きじゃない。

バフィー：あなたは愛されているし父さんは自分の机が好きなのよ。

スミス夫人：そう言えばマフィーさん、スミス軍曹の机を蹴ったと聞いたけど。ちょっと行ってその痕を確認するけどまさかそんな痕なんかないわよね。「功績の兆候」。前回何て書いたかしら。

マフィー：どうして愛してくれないの。マフィーのことが本当に好きだったらマフィーって言うでしょう。もし私本当に愛しているんだったら、言うでしょう？私マフィー、どうして書いてないの

……

バフィー：最後の手紙にあった「功績の兆候」は「兆しが見えた」だった。

スミス夫人：その前は？

バフィー：……「まもなく」。功績は、カッコ、いつでもカッコは閉じる、もらえるという報告の前です。

マフィー：私は茶色と白のを着ているよ。父さんがこの色の服の女の子が好きだってお姉ちゃん言ったよね。

スミス夫人：もうすぐいつでも今まもなくということね。まったく。あなたたち、このあいだの休暇のとき、お父さんは私に何て言ったか知っている？このあいだの休暇のとき、バスから降りて、空はとっても青くて、ほんとに、ブルースカイってこういうことって感じよ。海岸までバスで行って、前の席に座ったの。前の方が座り心地が良いからね。バッグを膝の上に置いて。心配だったの。バスの運転手さんに、止まらなかった町の名前を言ってって頼んだよ。急行だったからさ。急行バス。「モーヘイヴン」っていう場所は、通り過ぎた。通り過ぎたっていうか、通り抜けたんだけど。「モーヘイヴン」ねえ。前の席に座ったよ。海岸へ行って。茶色と白の服を来て。「全然旅していないみたいだし汗もかいていないね！」本当にそう言ったの、また。もうその声に圧倒されて周りの他のことは何も聞こえなかったね。二人で話したよ。あそこの任地で、ね、鳥の家で、あそこでは時間が私たちよりも丸一日あとに来るから。あっちの時間はこっちの時間じゃないんだよ。太陽のいたずらかね、いたずらしてみんなの予定をくるわせちゃってるんだね。父さんの時間が自分の時間になるときにはこっちが何か考えるようにしているんだって。私たちのためにね。何しているんだろうとかね。父さんが兵舎で暗い中チェッカーズゲームをしまいでいるときに、あなたたちはクリーム・オブ・ウィート（小麦のふすまを原料としたシリアル）の塊がどうのと言ってめめめして、編んだ髪を引っ張ったりなんかして、今は火曜の朝だから、昨日ってことよね。さ、朝ごはんが今日は冷たくなるわ。マフさんの頭をもう一度やり直してピンできつく止めましょう。父さんにとっては今日のことじゃないけど。明日ってわけ。いつも明日なんだね。それってすごくない？

バフィー：じゃあ「と予想される」と書くね。どう。

マフィー：私、父さんの机が好き。すごく好き。ね、キスするぐらい。抱きしめるよ。ぎゅー。ねママ、聞いて。スミス軍曹の机にキスしてるよ。抱きしめているよ。ぎゅーって。水玉模様の服を着た女の子が好きなんでしょう。ですよ、スミス軍曹。わたしその水玉模様よ。水玉模様。

スミス夫人：「仕事についての言及」は「はい」にチェックにして。

バフィー：チェックと。

マフィー：「家族についての言及」は「いいえ」にチェックだね。

スミス夫人：「はい」にチェックして、バフィーちゃん。

バフィー：「はい」にチェック。

マフィー：マフィーへの言及なし。

バフィー：「^{センサー}検閲」だよ、マフ。

スミス夫人：^{センサー}はさみ？

バフィー：「検閲」。ザ・検閲って言う集団のこと。「ミスター検閲さん」は、スミス軍曹が話すことを規制するの。場合によってはスミス軍曹の話すことが「エフォート」を危険にさらすこともあるからね。言ったことや言い方は場合によっては敵の手がかりになるから。スミス軍曹が言ったことでスミス軍曹が不意打ちを食らうってこともあるんだよ。スミス軍曹はね、マフ、暗号の言葉を使っているんだよ。秘密のサインや信号とかをね。私たちが見たらなんでもない単語を使ってスミス軍曹は背信行為の方法を綴ることができたりするの。そうでしょ、スミス夫人。父さんは「司令官」としか言ってなかったでしょう。父さんは司令官の名前を言うことを禁じられているんだよ。マフィーって私たちは毎日言っているけど、スミス軍曹にとってはマフィーって言う名前の響きは極めて危険なんだろうと思うよ。

マフィー：マフィーはきわめて危険なんかじゃない。

スミス夫人：マフィーね、マフィー、マフィーって地雷敷設域みたいな響きよね。マフィー、地雷とは何？

マフィー：地雷は手足をばらばらにするもの。地雷がありすぎると戦争で負ける。

スミス夫人：お利口ね。

マフィー：「エフォート」を忘れるな。

スミス夫人：お利口さん！

バフィー：マフィー、みんなで犠牲を払わないと。

スミス夫人：そしたら「マフィー」って名前にしなかったのにね。でもマフィーが生まれた時には地雷も発明されていなかったから。

マフィー：地雷って私の名前にちなんだでつけられたの？

スミス夫人：さ、茶色と白のを着てきなさい。みんな海へ行くわよ。

バフィー：マフィーはもう着てますよ、スミス夫人。

マフィー：スミス軍曹来るの?!?

スミス夫人：シワになっていないでしょうね、マフィさん。ちよい来て。触らして。んー。いいか。スミス軍曹にシワは見せたくないからね。そうそう。初めて父さんがあなたを見た時のこと思い出した。何マイルも旅してバスから降りたんだよ！茶色と白の水玉の点々が、旅なんかちっともしてなくて、汗もかいていないみたいだったんだから！

マフィー：父さん喜んだの？

バフィー：そう。

スミス夫人：もうすぐあなたたちの軍曹のお休みになるからね。お二人さん、弟なんかどう？ねえ。三人って家族って感じでしょう。父さんは前から男の子が欲しかったし。「エフォート」の人はもう来たんだよ？

バフィー：0-800。

スミス夫人：何渡した？

バフィー：フロアスタンド。

スミス夫人：緑の真鍮の土台のやつ？

バフィー：蓄音機も。

スミス夫人：レコードも？そお。どのみち使わないか。今必要なのは……

バフィー：弟。

スミス夫人：弟よ！スミス軍曹はもうすぐ休暇ですからね。どお、バフィー？マフィー？バフィー？

マフィー？

(飛行機音が大きくなる)

E.

スミス軍曹：今ごろ君たちは「今日」だと思う。夕べふと思ったんだ。毎日四時間私は「今日」と言うことができるってね。「今日」の意味、分かってくれるよね。要するに私たちには「オーバーラップ」する時間があるんだよ。四時間のオーバーラップする時間さ。私の日と君たちの日が同じとき。この世時間はあつという間に過ぎて残りの二十何時間と同じように見えるだけだからこの時間をよーく注意していないといけない。こんなちょっとした知識が昨晚頭にふと浮かんだんだ。それから、……、私の昇進のことだ。スミス夫人、いまはスミス軍曹一家だよ、昇進した。メダルに「スミス軍曹」って、まさに今この私が話している瞬間に刻んでもらっていると思う。私の机だ。これが私の机だ。なあ。命を救ったんだ。誰もが言えることじゃないんだよ、スミス夫人。誇りに思ってくれるよね。間違いなく。偉いでしょ。偉いよね。まるで……。誰もが命を救えるわけじゃないんだよ。

(飛行機音が大きくなる)

F.

スミス夫人、バフィー、マフィー、ダフィー。素敵な家。

スミス夫人：バフィーちゃん、今日軍曹の机にアイロンかけた？

バフィー：はい、かけました。スミス夫人。

スミス夫人：シワになってほしくないからね。

バフィー：そうですね、スミス夫人。明日ダフィーには別のをあげるから。いい？マフィー。ダフも。

スミス夫人：別の何？

ダフィー：ママ、カメは哺乳類？

スミス夫人：哺乳類？哺乳類って何？

マフィー：子供を産む胎生動物。授乳で育てる。

スミス夫人：バフィー、今日は何……

バフィー：違うよ、ダフィー。カメは哺乳類ではないよ。今日は金曜日です、スミス夫人。

マフィー：ねえ、バフ姉さん、ヨーヨーやってもいい？

バフィー：気を付けてやってよね、いい？

スミス夫人：机に気を付けてちょうだい。スミス軍曹が帰ってきて、机がヨーヨーの痕だらけなんてことになっていたら。

ダフィー：スミス軍曹は哺乳類？

スミス夫人：哺乳類って何？

マフィー：胎生動物。世界一周、ヒュー。

バフィー：：そうよ、ダフィー。

マフィー：授乳する。ヒュー！ヒュー！

スミス夫人：今日は金曜日だったかしら？

バフィー：そうです、スミス夫人。

ダフィー：父さんはカメだって言った。

スミス夫人：カメ？！今日は金曜日。カメって何？

マフィー：魚のようなふりをします、はい、スミス夫人。世界一周！世界一周！

スミス夫人：釣り糸を投げたら私にかかる。今日は金曜日。金曜日には魚を食べる。今日は魚よ。

バフィー：スミス軍曹が自分のことをカメと言ったのは言葉のあやなんだよ、ダフィー。スミス軍曹は言葉の比喩を使っていたの。

スミス夫人：出かけるわよ。はい、はい。魚を食べる。ダフィー、水玉の服を着なさい。私たちと同じようなのを着て。

ダフィー：どうやって息をするの？

スミス夫人：私たちと同じように。

ダフィー：水中で。

スミス夫人：私たちと同じように。私たちと同じように。スミス軍曹が来るのよ。間もなく。今日。スミス軍曹が今日間もなく来るよ。

マフィー：間もなく今日今日間もなくすぐ、間もなく今日すぐ間もなく今日。世界一周世界一周。

ダフィー：冬中ずっとえら呼吸するの？

バフィー：夏にたくさん空気を吸って。蓄えるでしょ。そして冬になったら、蓄えの空気を使うっていうね。ラクダも水を使うじゃない。

ダフィー：ラクダは水のなかで呼吸してるの？ラクダにもえらがあるの？

スミス夫人：もちろん、えらがあるよ。オーバーラップって聞いたことあるでしょ。オーバーラップはギャップなの。ギャップがオーバーラップしてるの。まさにミッシングリンク。リンクを見つけろ。猫を外に出せ。壁にある子猫の出入り口をふさいでよ。風が入ってくるから。出入り口をふさいで。風がはいつてくから。

バフィー：出入り口はふさがってるよ。

スミス夫人：寒いよ。私は風が来ていると思う。風が来てる。

マフィー：母さんが風を感じる。みんなこのまま凍えてしまう世界中世界中。

バフィー：出入り口はびったりふさがっています。

マフィー：世界一周。

スミス夫人：オーバーラップを見つけなさい。

マフィー：世界一周。

ダフィー：オーバーラップはギャップだよ！

バフィー：じゃない。

ダフィー：だよ。

マフィー：世界一周世界一周。

ダフィー：オーバーラップはギャップだよ！

バフィー：じゃない。

ダフィー：ギャップだよ。

マフィー：世界一周世界一周。

スミス夫人：ストップ。

マフィー：世界……

スミス夫人：音なし。

バフィー：バフィーイ。

マフィー：マフィーイ。

ダフィー：ダフィーイ。

スミス夫人：風が来てる。ヨーヨーをやめなさい、マフィーさん。軍曹さんに答えてもらいましょうか。

まだ、まだ風が来るね。0-800の人は来た？何をあげたの？どのみち必要ない。今必要なのは……。

夕べ空に光が見えたの。誰も見なかったでしょう。あなたたちみんなばたんきゅうだったものね。

切れ目を通して見えたの。待っていたら空に光が見えたのよ。止まって見て聞いてみたら、男の

人が燃えながら落ちてくる。落ちてくる。真夜中に落ちてきたの。太陽は見えなかった。その人、

別の世界から来たと思う。止まって見て聞いてみたけど、わたしは何もできなかった。なんかす

ごく遠くで起きていたことなの。みんなあなたが生まれる前に起きたこと。ダフィー、茶色と白

の服を着てきなさい。軍曹は家族が茶色と白の服を着ているのが好きなの。マフィー。犬の散歩。

マフィー：犬の散歩犬の散歩。

スミス夫人：軍曹はきちんとしているのが好きなの。犬の散歩ほどきちんとしたことはないわよ。

マフィー：犬の散歩。犬の散歩。世界一周。犬の散歩。

スミス夫人：歩行器に立たせてちょうだい。ねえほら、私の歩行器として、はい、新米兵！軍曹が来るよ。さっと気をつけ！

ダフィー：カメは夜、砂場に卵を産むよ。そのあと行ってしまおうんだ。自分の卵がどれかってどうや

って分かるんだろう。どの卵かって？卵は孵って赤ちゃんカメは海へ向かって這い始める。親たちはどうやって分かるんだろう。ねえ、バフ、どうやって親たちは子どもたちのことがわかるの。

バフィー：そんなに気にしないんだよ。

スミス夫人：気をつけー！

スミス軍曹：やあ。帰ったよ。

バフィー：パパが帰ってきた！

マフィー：パパが帰ってきた！

ダフィー：パパが帰ってきた！

バフィー、マフィー、ダフィー：パパー！

スミス夫人：スミス軍曹。今日は一日どうだった？

スミス軍曹：大丈夫だったよ、スミス夫人。キスしてくれ。えっ、スミス夫人、目が見えなくなっているの。目が見えないんだね、スミス夫人。いつ目が見えなくなったんだ。

バフィー：パパ、何を持って来てくれたの？

スミス夫人：数年前よ。何年も見えないの。

スミス軍曹：いつ？

スミス夫人：何年も。ずっと何年も前に。

マフィー：パパ、何を持ってきてくれたの？

スミス軍曹：手紙に書いてくれれば……

ダフィー：パパ、何を持ってきてくれたの？

スミス軍曹：電話してくれれば……

バフィー：チャイナ人形を買ってきてくれるって約束したよね！

スミス軍曹：なんか知らせを寄こしてくれればよかったのに、スミス夫人。毎日全然奥さんの目が見えなくなっていたことなんて知らなかったよ。どこで見えなくなった？いつ見えなくなった？なぜ交替を頼まなかったんだろう？そのことについて知らせてくれればよかったのに。

スミス夫人：あなたが戻る前に目が戻ると思ったの。立ち寄るって言うてくれればよかったのに。

スミス軍曹：手紙で言ったし電話もしたよ。

バフィー：台帳取ってくる。

スミス夫人：ねえスミス軍曹、この茶色と白の服、どう？

スミス軍曹：おたくどちら様でしたっけ？

ダフィー：ダフィーだよ。飛行機買ってくれるって約束したじゃない。

マフィー：私マフィー。

スミス夫人：スミス軍曹ですね。私たちのスミス軍曹ですよね？スミス軍曹、私たちの茶色と白どう思います？

ダフィー：ぼくは父さんとそっくり。ぼくの飛行機持ってきてくれた？

スミス軍曹：私もカッコいい男だったんだよ昔は、君みたいだね。ほら写真がある。お財布一杯の写

真だぞ。ほら、これが私だ。

ダフィー：違うね。それ、ほくだよ。ほくたち似てるんだよ。

バフィー：台帳を持っていかれた。机の中に台帳をしまっておいたのに。

スミス夫人：そりゃ残念。文書が要るよね。証拠の。

スミス軍曹：手紙を書いたよ！電話したよ！

スミス夫人：スミスってのはいっぱいいるからね。スミスはやたらと多い。スミスさんって、よくある名前なもの。

ダフィー：ひこうき買って来てくれるって約束したよ！

スミス軍曹：帰宅してただろ。家族だったじゃないか。それが証拠だ。

スミス夫人：帰宅が増えると家族が増える。

スミス軍曹：昇格したよ。ね？ほらこれがメダルだよ、名前が入っている。ミスターにしてくれたんだ。ミスター・スミスは線章をもらった！

スミス夫人：昇格ね。昇格って何。

バフィー：チャイナ人形を買ってきてくれるって約束したよ！

スミス軍曹：昇格って言うのは格別になることだよ。線章をもらうこと。線章をもらったんだよ。ほらね！

スミス夫人：触らせて。

スミス軍曹：人命を救ったんだ！空から落ちてきた人を捕まえた。

スミス夫人：男を捕まえた？空から？夕べ光を見たのよ。空に。別の世界からの光。あなたが捕まえたとは思わなかった。うちの昇格したスミスさんではないですよ。

スミス軍曹：岩の上に立っていた。止まって聞いたら人が落ちてくるのが見えて……

マフィー：地雷を踏んだんだね。新聞で読んだ。地雷は覚えているもの⁽²⁾。たくさん地雷があると戦争に負ける⁽³⁾。エフォートを忘れるな。地雷は足を吹き飛ばす。

スミス軍曹：君は私の子どもなのか？⁽⁴⁾

バフィー：両足がない。

スミス軍曹：君は私の子どもなのか？

ダフィー：戦争に負けたんだ。

スミス軍曹：君は私の子どもなのか？

スミス夫人：あら、スミスさん、両足失くしたのはなぜ、スミスさん、戦争に負けたのね。スミスさん、いつ足を失くしたの。スミスさん、いつ戦争に負けたの。0-800に人が来るのよ。何をあげたらいいの？どのみち必要がない物。バフィーマフィーダフィー？⁽⁵⁾お父さんの休暇がもうすぐなんですって。そう、必要なもの。もう一人男の子よ。いつも切のいい四が良いと思っていたのよ。四。四。四人。お父さんが帰ってきたら注文しておくわね。なに？

ダフィー：ほくたちカメなの？ねえ、スミスさん、ほくたちカメなの？

バフィー：ダフィー。

スミス軍曹：いや。違う。……いや……なんだ……カメじゃない。ナメクジだ。私たちはナメクジだよ。

(飛行機音が大きくなる)

G.

スミス軍曹：私はいつも何か高貴なことをしたいと思っていた。自分に相応しいこと以上を求めるということではない。とにかく高貴なこと。なんか高貴なことの一部でもいい。昔の時代にあったようなこと。昔の戦争の昔の時代にあったこと。高貴な時代は昔のことかもしれない。高貴なことをする時代は過去のことだったんだ。四時間時間が重なる時間があったんだ。四時間というのは、ほんとうの意味で「今日」が今日と言える時間という意味でね。その四時間家族はいっしょに四時間を過ごしていた。その他の一日中みんなばらばらだ。前は通り抜ける出入り口があったのに。出入り口はふさがれてしまった。空から落ちてくる男の子を見たんだ。燃えていた。星かと思ったよ。何年も前に死んだ星だけど、出入り口を通して光を放ってくれていた星。願い事をしたりして。腕を広げて、家族のために願った。彼が私の上に落ちて来た。太陽に近く、高く飛びすぎたんだって。私が捕まえたんだけど落ちてしまったって。私の上に落ちたって。それで昇格。別格にしてくれた。私が捕まえたんだけど落ちてしまったって。私の上に落ちたって。そしたら功績を称えてくれた。引き立ててくれた。私は彼をつかまえたけど、彼は落ちてしまったって。私の上に落ちたんだ。つまり、私が彼の転落を止めた。彼の命を救った。以来彼に会ったことはない。違う、まったくな……ダフィー……うん……マフィー、バフィー、いや、私たちはカメですらない。そう。ナメクジ。ナメクジだ。私たちはナメクジだよ。

(飛行機音が大きくなる)

注

- (1) 原文に文と文の間のピリオドはない。パークスの作品では句読点はしばしば省略される。
- (2) 原文は A mine is a thing that remembers. 前半にあるマフィーのセリフでは remembers は dismembers であった。A mine is a thing that dismembers. つまり、mine (地雷) は人の手足をばらばらにするものでもあり、その記憶を忘却させないものでもあると解釈できる。パークスの「反復修正」技法 (反復しながら一部を修正していく手法) である。
- (3) 前半にも登場する台詞。原文は Too many mines lose the war. mine を「私の物」と主張することと解釈することも可能であるかもしれない。
- (4) 原文は You one uh mine? 前文の「地雷」という意味の mine と「自分の物」という意味の mine の言葉遊びになっている。スミス軍曹は mine (地雷) によって mine (自分自身) の一部である足を失っている。ここでは子どもたちが自分の物、つまり家族の一員かと聞いている。長期不在して

いたため、自分の子どもである mine を判別することができない。その意味でスミス軍曹は自分自身である mine を失っていると解釈できる。

(5) 原文はスペースのない BuffyMuffyDuffy。子どもを一セットとして見ている様子がかがえる。

参考文献

Kolin, Philip C., ed. *Suzan-Lori Parks Essays on the Plays and Other Works*. Jefferson, North Carolina, and London: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2010.

Gassow, Mel. "Review/Theatre: *Identity and Imperceptible Mutabilities in the Third Kingdom*." *The New York Times*, Sept. 20, 1989: C24.

Geis, Deborah H. *Suzan-Lori Parks*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 2008.

Parks, Suzan-Lori. "*Imperceptible Mutabilities in the Third Kingdom*," in *The America Play And Other Works*. New York: Theatre Communications Group, 1995.